讃岐平賀國倫士彝識

〔平賀鳩溪實記〕平賀源内初て居所を求る事幷醫師兒島圓達が事、

源内は標札を出し、儒醫の書籍ども會讀講釋の看板を出し、其上本草會を催したり、其頃は、神田佐久間町の醫學館の初りし時分ゆへ、醫學繁昌の時也、爰に中橋邊に、兒島圓達といへる、本道醫師あり、源内が、本草會を聞て珍敷會也、今まで所々本草の會有といへども、會讀等にて書籍の沙汰計也、然るに此度平賀源内といへる者、藥草會取立しは幸なる哉、我等も年來藥草に苦んだり、出席して器量の程を試んと、同志の醫師十五六輩、各異草或は鳥獸の異るを持參して、案内し入來れば、源内は上席に客座を設け、門下の諸生左右に居幷び、和漢山海の異物を集め、衆議判をいたしけり、圓達は應對終つて、藥物を取出し衆議判に及ぶ所、大勢にて名を付られぬ異物は、いづれも、源内は委しく知り、和漢の名目、明らかに付て論定り、また源内が所持の物は、大勢あつまるといへども、一つとして知るものなし、數日の會、何にても、右の如くなりければ、圓達はじめ、江戸中に、本草家と稱する醫師、源内に屈服せざるは一人もなく、是よりして、源内が名は高く成て、儒醫ともに信仰せり、圓達は、宿所へ歸り、成程源内は博物なり、中々及べきにあらずと云て、社中の者へも、兎角本草におゐては、平賀程なる者はなしと感心して、夫より心易く出會せり、源内は、此本草會を催せし故に、高名を取り、弟子抔も多くなりて、不自由なる事もなく、中華蠻國の名產共に集れり、諸大名へも出入すれば、召抱べき沙汰あれど、仕官の存知寄なくして、御直參にも成たき心と、人々評判しける、夫よりして、藥種屋書物屋共、源内に近付て、和漢の藥種製法など、或は書籍新渡の直段付、日々寸暇なく、其間には、會讀講釋諸家へ出入げる故に、殊の外手廣になり、近國は扨置、中華までも名を揚しは、先本草が初めなりしと也、住居抔も手狹になれば、神田白壁町へ轉居して、鳩溪先生と號して、儒書醫書の釋義に光陰を送りける、